

Foliated bundlesの接続について

北大 理学部 鈴木 治夫

1. Foliated principal GL_r -bundles における, transverse projectable connections の構成と, それによって定まる 2 次特性コホモロジー類の, 一つの性質について考察する.

"微分可能"は C^∞ をいぬるものとし, 微分可能多様体はすべてパラコンパクト, ハウスドルフであると仮定しておく.

\mathcal{F} を n 次元微分可能多様体 M の上の, codimension q の foliation とする. $T(M)$ を M の接ベクトル・バンドル, $F \subset T(M)$ を,

\mathcal{F} の leaves に接するベクトルから成る, 部分ベクトル・バンドルとする. Foliation \mathcal{F} をもつ多様体 M を (M, \mathcal{F}) とかき,

$E(M, p, GL_r)$ を (M, \mathcal{F}) の上の foliated principal GL_r -bundle とする.

M はパラコンパクトだから, $E(M, p, GL_r)$ の上にリーマン接続が存在する. とくに, 剰余ベクトル・バンドル $V_T = T(M)/F$ の

Bott 接続 [1] により, V_T の frame bundle $E(V_T)$ は, (M, \mathcal{F}) の上の foliated principal GL_r -bundle ($q=r$) となる. これを $E_T(M, p_T, GL_q)$

とかく。 Bott 接続は, その transverse connection となる [2].
 M_1 を微分可能多様体, $f: M_1 \rightarrow M$ を \mathcal{F} に transverse な微分可能写像, $\mathcal{F}_1 := f^*\mathcal{F}$ を, f によって \mathcal{F} から誘導される, M_1 の上の co-dimension q foliation とする. f による $E(M, p, GL_r)$ の誘導バンドルを $f^*E(M, p, GL_r)$ とし, f に対応する principal bundle map を $\bar{f}: f^*E(M, p, GL_r) \rightarrow E(M, p, GL_r)$ とかく. $f^*E(M, p, GL_r)$ は, (M_1, \mathcal{F}_1) の上の foliated principal GL_r -bundle $E(M_1, p_1, GL_r)$ となることが容易にわかる.

$WO_{q,r} \in$ differential algebra: $R[c_1, c_2, \dots, c_s] / (\deg > q) \otimes \wedge(f_1, f_2, \dots, f_l)$,
 $(R$ は実数体), $s := \min(q, r)$, $l := \max\{2m+1 \leq r\}$, $d(c_i) = 0$, $d(f_j) = c_j$ ($j \leq s$), $q < l$ の場合, $d(f_j) = 0$ ($j > s$) とする. M 上の複素数係数の微分形式環を $A^*(M)$ とかく. M 上の principal GL_r -bundle E の接続 θ の曲率形式に対し, GL_r の Lie 環 \mathfrak{gl}_r の, 次数が q より大きい任意の不変多項式の値が, 0 となるならば, θ とリーマン接続 θ^0 とのワフライン結合を用いることにより, 一般化された Bott の differential algebra map, $\lambda_{q,r}(\theta): WO_{q,r} \rightarrow A^*(M)$ が構成され, コホモロジー準同形, $\Delta_{q,r}(\theta): H^*(WO_{q,r}) \rightarrow H_{DR}^*(M; \mathbb{C})$ (H_{DR} は de Rham コホモロジー, \mathbb{C} は複素数体) が得られる. E が (M, \mathcal{F}) 上の foliated principal bundle $E(M, p, GL_r)$ で, θ がその transverse connection ならば, $\Delta_{q,r}(\theta)$ は, θ のとり方によらずに定まる. ([1], [2] 参照). これは, (M, \mathcal{F}) の $E(M, p, GL_r)$ の

特性準同形とよばれるものである。 とくに, $WO_{q_i} = WO_{q_i, \theta}$ とおき, $E = E_r(M, p, GL_r)$ にとるとき, $\Delta_{q_i, r}(\theta)$ は, Bott の特性準同形 $\Delta_{q_i}(\theta): H^*(WO_{q_i}) \rightarrow H_{DR}^*(M; \mathbb{C})$ となる。 WO_{q_i} のコサイクルを γ とかく。

M を $q_i = 2r+1$ 次元微分可能多様体, \mathcal{F} を M の上の codimension r の foliation とし, $\mathcal{F}(f)$ を submersion $f: M_1 \rightarrow M$ による, M_1 の foliation とする。

定理 \mathcal{F} が non-trivial な Bott の q_i 次元 2 次特性コホモロジー一類, $\Delta_r(\mathcal{F})[\gamma] \neq 0$ をとると, $f^*: H^q(M; \mathbb{R}) \rightarrow H^q(M_1; \mathbb{R})$ が injective ならば, $(M_1, \mathcal{F}(f))$ の上の foliated principal GL_r -bundle $E_0(M, p, GL_r) := f^*E(\mathcal{F})$ において, transverse projectable connections ω^0 および ω が存在し, γ に対する 2 次特性コホモロジー一類が, それぞれ $\Delta_{[2], r}(\omega^0)[\gamma] = 0$ および $\Delta_{[2], r}(\omega)[\gamma] \neq 0$, ($[2] = r$) となる。

$\Delta_r(\mathcal{F})[\gamma]$ として, 例えは, Godbillon-Vey コホモロジー一類, $\Delta_r(\mathcal{F})[c_1^2 \eta]$ をとることができ, submersion f として, M のベクトル・バンドルの射影写像をとることができる。

2. 一般に, \mathcal{F} に transverse な微分可能写像, $f: M_1 \rightarrow M$ による誘導バンドル, $f^*E(M, p, GL_r) = E(M_1, p, GL_r)$ において, 次の補題が成立する。

補題 2.1. θ, θ^0 および ω を, それぞれ, (M, \mathcal{F}) の上

の $E(M, p, GL_r)$ の transverse, リーマンおよび transverse projectable connection [2] とするとき, $\tilde{F}^*\theta$, $\tilde{F}^*\theta^0$ および $\tilde{F}^*\omega$ は, それぞれ (M_1, \mathcal{F}_1) の上の $E(M_1, p_1, GL_r)$ の transverse, リーマンおよび ω' transverse projectable connection とする.

証明 $\mathcal{F}_E \in \mathcal{F}$, \mathcal{F} の $E(M, p, GL_r)$ におけるリフトとし, F_E を \mathcal{F}_E の leaves の接ベクトルから成る, $T(E(M, p, GL_r))$ の部分ベクトルバンドルとする. $\mathcal{F}_{1,E} := \tilde{F}^*\mathcal{F}_E$ は, $E(M_1, p_1, GL_r)$ における \mathcal{F}_1 のリフトであり, 対応する部分ベクトルバンドルを $F_{1,E}$ とかく. $e \in E(M_1, p_1, GL_r)$ に対し, $X \in F_{1,E}|_e$ ならば, $\tilde{F}_*X \in F_E|_{\tilde{F}(e)}$ だから, $\tilde{F}^*\theta(X) = \theta(\tilde{F}_*X) = 0$ とする. これは, $\tilde{F}^*\theta$ が transverse connection であることを示している. V を $E(M, p, GL_r)$ に対応するベクトルバンドル, v_i を V の局所基底ベクトル場とし, w_i を v_i に対応する \tilde{F}^*V の局所ベクトル場 $(w_i(y) = (v_i(\tilde{F}(y)), y), y \in M_1)$, $i = 1, 2, \dots, r$ とする. θ^0 に対応する V の接続を ∇^0 とするとき, M_1 の局所接ベクトル場 Y に対し,

$$\begin{aligned} (\tilde{F}^*\nabla^0)_Y \langle w_i, w_j \rangle (y) &= \nabla_{\tilde{F}_*Y}^0 \langle v_i, v_j \rangle (y) \\ &= \langle (\nabla_{\tilde{F}_*Y}^0 v_i, y), (v_j(\tilde{F}(y)), y) \rangle + \langle (v_i(\tilde{F}(y)), y), (\nabla_{\tilde{F}_*Y}^0 v_j, y) \rangle \\ &= \langle (\tilde{F}^*\nabla)_Y w_i, w_j \rangle (y) + \langle w_i, (\tilde{F}^*\nabla)_Y w_j \rangle (y). \end{aligned}$$

この関係式は, 接続の条件の下で保存されるから, \tilde{F}^*V の任意のベクトル場 s_1, s_2 に対し成り立つ. E の任意の局所 section s と, これに対応する \tilde{F}^*E の局所 section s' とれば,

$s^*(f^*\theta^0) = f^*s^*\theta^0$ となり, したがって $f^*\theta^0$ は, f^*V のリーマン接続に
対応するから, $E(M_1, p_1, GL_r)$ のリーマン接続となる。

$N \ni \mathcal{F}$ は transverse な, M の各次元局所部分多様体とし,
 N の上 N の \mathcal{F} の局所 submersion を f とする。 f は $E(M, p, GL_r)$ の
局所積構造の開集合 $U \subset M$ の上で定義されるとしてよい。

必要ならば, $N \ni \mathcal{F}$ をさらに小さくとり, M_1 の中に微分可能各次
元局所部分多様体 $N_1 \ni \mathcal{F}_1$ を見出し, f によって, N の上に微分位
相同形に写されるようにすることが出来る。このとき, M_1

の開集合 $U_i \subset f(U)$ が存在し, $f_{i1} := (f|_{U_i})^{-1} \cdot f \cdot f_{i1} : U_i \rightarrow N_1$ は, U_i にお
ける \mathcal{F}_1 の局所 submersion と表すように出来る。おきるかに,

$f \cdot f_{i1} = f \cdot f_{i1}$. $E(M, p, GL_r)|_U \cong f^*E(M, p, GL_r)|_N$, $E(M_1, p_1, GL_r)|_{U_i} \cong$
 $f_{i1}^*E(M, p, GL_r)|_U$ から, f および f_{i1} の covering principal bundle

maps, $\bar{f} : E(M, p, GL_r)|_U \rightarrow E(M, p, GL_r)|_N$ および $\bar{f}_{i1} : E(M_1, p_1, GL_r)|_{U_i} \rightarrow$
 $E(M_1, p_1, GL_r)|_{N_1}$ があるから, $\bar{f}_{i1} \cdot \bar{f} |_{E(M_1, p_1, GL_r)|_{U_i}} = \bar{f}_{i1} \cdot \bar{f}$ と出来る。 $E(U)$

$i := E(M, p, GL_r)|_U$, $E(U_i) := E(M_1, p_1, GL_r)|_{U_i}$ 等とかくことにする。

$\omega|_{E(U)} = \bar{f}^*(\omega|_{E(N)})$ から,

$$\begin{aligned} f^*\omega|_{E(U_i)} &= (\bar{f}|_{E(U_i)})^*(\omega|_{E(U)}) \\ &= (\bar{f}|_{E(U_i)})^* \cdot \bar{f}^*(\omega|_{E(N)}) \\ &= (\bar{f}_{i1} \cdot \bar{f} |_{E(U_i)})^*(\omega|_{E(N)}) \\ &= (\bar{f}_{i1} \cdot \bar{f}_{i1})^*(\omega|_{E(N)}) \\ &= \bar{f}_{i1}^*(f^*\omega|_{E(N)}) \end{aligned}$$

となる。したがって、 $f^*\omega$ は (M_1, \mathcal{F}_1) の上の $E(M_1, \mathcal{F}_1, GL_r)$ の、
transverse projectable connection である。 証明終

gl_r の不変多項式環 $\mathbb{R}[I(gl_r)]$ とかく。 実数体上の $r \times r$ 行列 A
に対し、不変多項式 c_i を、 $\det(I+tA) = 1 + \sum_{i=1}^r t^i c_i(A)$ (t は不定
元) と定めるとき、 $I(gl_r) = \mathbb{R}[c_1, c_2, \dots, c_r]$ となることはよく知られ
ている。 $\pi: M \times \mathbb{R} \rightarrow M$, $\bar{\pi}: E(M, \mathcal{F}, GL_r) \times \mathbb{R} \rightarrow E(M, \mathcal{F}, GL_r)$ を自然な
射影とする。 $E(M, \mathcal{F}, GL_r)$ の接続 θ およびリーマン接続 θ^0 に対
し、 $\bar{\theta} := \bar{\pi}^*((1-t)\theta + t\theta^0)$ ($t \in \mathbb{R}$) とかく。 $\bar{\theta}$ は $E(M, \mathcal{F}, GL_r) \times \mathbb{R}$ の接続と
なる。 $\lambda(\theta), \lambda(\theta^0, \theta): I(gl_r) \rightarrow A_c^*(M)$ を、 $\lambda(\theta)_i := (\frac{\sqrt{t}}{2\pi})^i \varphi_i(\omega)$ (φ_i は i 次
不変多項式、 ω は θ の曲率形式)、 $\lambda(\theta^0, \theta)_i = \pi_* \lambda(\bar{\theta})_i|_{M \times [0, 1]}$ 、
 π_* は trivial bundle π の integration over the fibre と定める。

$d\{\lambda(\theta^0, \theta)(c_{2i-1})\} = \lambda(\theta)(c_{2i-1})$ ($1 \leq 2i-1 \leq r$) が成り立つ ([1], [2]) から、 θ の
曲率形式' に対して、 $I(gl_r)$ の r より大きい次数の、任意の多項
式の値が 0 となることを、differential map, $\lambda_{p,r}(\theta): W_{p,r} \rightarrow A_c^*(M)$ が
、 $\lambda_{p,r}(\theta)(c_i)_i = \lambda(\theta)(c_i)$ ($1 \leq i \leq \min(p,r)$)、 $\lambda_{p,r}(\theta)(h_j)_i = \lambda(\theta^0, \theta)(c_j)$ ($j=1,$
 $3, \dots, l$) によって定まる。 とくに、 (M, \mathcal{F}) 上の $E(M, \mathcal{F}, GL_r)$ の trans-
verse connection θ に対して、Bohl の vanishing theorem により、 $\lambda_{q,r}(\theta)$
が定まる。 補題 2.1 により、 $f^*\theta$ は (M_1, \mathcal{F}_1) の上の $E(M_1, \mathcal{F}_1, GL_r)$
の transverse connection となるから、同様に $\lambda_{q,r}(f^*\theta)$ が定まる。

補題 2.2. $\lambda_{q,r}(f^*\theta)(c_i) = f^*(\lambda_{q,r}(\theta)(c_i)) \quad 1 \leq i \leq s,$

$$\lambda_{q,r}(f^*\theta)(h_j) = f^*(\lambda_{q,r}(\theta)(h_j)) \quad j=1, 3, \dots, l.$$

証明 \rightarrow 1式は, 直接の計算により容易に示される. 補題 2.1 により, $f^*\theta^0$ がリーマン連続であることを注意する.

$\pi_1: M_1 \times \mathbb{R} \rightarrow M_1$ を自然射影とすると, integration over the fibre の naturality [3, VII §5 PROP. VIII] により,

$$\begin{aligned} \lambda_{q,r}(f^*\theta)(c_j) &= \lambda(f^*\theta^0, f^*\theta)(c_j) \\ &= \pi_{1*}(\lambda((f \times \text{id})^*\bar{\theta})(c_j) | M_1 \times [0,1]) \\ &= \pi_{1*}((\frac{f}{2\pi})^* c_j ((f \times \text{id})^* \Omega(\bar{\theta})) | M_1 \times [0,1]) \\ &= f^* \cdot \pi_{1*}((\frac{f}{2\pi})^* c_j (\Omega(\bar{\theta})) | M \times [0,1]) \\ &= f^*(\lambda(\theta^0, \theta)(c_j)) \\ &= f^*(\lambda_{q,r}(\theta)(c_j)), \end{aligned}$$

となるから, \rightarrow 2式が得られる. 証明終

3. 定理の証明. θ を (M, \mathcal{F}) 上の $E_T(M, p, GL_r)$ の, transverse connection とする. $f^*E_T(M, p, GL_r)$ は, $(M_1, \mathcal{F}_1) = (M_1, f^*\mathcal{F})$ の上の foliated principal GL_r -bundle であり, $E_T(M_1, p_1, GL_r)$ と一致する. 定理の仮定と補題 2.2 により,

$$[\lambda_{r,r}(f^*\theta)(\gamma)] = [f_* \lambda_{r,r}(\theta)(\gamma)] = f_* \Delta_r(\mathcal{F})(\gamma) \neq 0.$$

$f^*E(\mathcal{F})$ において, codimension q foliation $\mathcal{F}(f)$ のリフトとして, submersion $\bar{f}: f^*E(\mathcal{F}) \rightarrow E(\mathcal{F})$ における foliation $\bar{\mathcal{F}}$ とすることにより, $f^*E(\mathcal{F})$ は, (M_1, \mathcal{F}_1) の上の foliated principal GL_r -bundle $E_0(M_1, p_1, GL_r)$ となる.

$E_T(M, p, GL_r)$ の上のリーマン連続 θ^0 , \mathcal{F} の transverse connection θ

ε とり, $\omega_i^0 = f^* \theta^0$, $\omega_i = f^* \theta$ とおく. ω^0, ω は共に, $(M_1, \pi_1^*(H))$ の上の $E_0(M_1, p_1, GL_r)$ の transverse projectable connections で, Bott の strong vanishing theorem が成立するから, $\Delta_{[2]_r, r}(\omega^0)$ および $\Delta_{[2]_r, r}(\omega)$ が定まる. 補題 2.1 によつて, ω^0 はリー-マン接続だから, $\lambda_{[2]_r, r}(\omega^0)(h_j) = 0$ と取り, 1 をかゝつて, $\Delta_{[2]_r, r}(\omega^0)[\gamma] = 0$ となる.

$$\Delta_{[2]_r, r}(\omega) = [\lambda_{r, r}(\omega)(\gamma)] \neq 0. \quad \text{証明終}$$

$\mathcal{F} \in M$ の上の codimension q の foliation とする. (M, π) 上の, foliated principal GL_r -bundle $E(M, p, GL_r)$ における, transverse projectable connection ω に対し, $W_{[2]_r, r}$ の 2 重イクル,

$$\gamma = c_{i_1} \cdots c_{i_\lambda} \otimes h_{j_1} \wedge \cdots \wedge h_{j_m}$$

$$1 \leq i_1 \leq \cdots \leq i_\lambda \leq s = \min([2]_r, r), \quad 1 \leq j_1 < \cdots < j_m \leq l \quad (j_\beta \text{ は奇数}),$$

ε と α とを, $2(\sum_{k=1}^{\lambda} i_k + j_1) > q+1$ なるものは, 対応する 2 次特性コホモロジイ類, $\Delta_{[2]_r, r}(\omega)[\gamma]$ は ω のとり方による非零 ([2]) が, γ の 2 重イクルの条件 $2(\sum_{k=1}^{\lambda} i_k + j_1) > q$ だけでは, 例えは $\gamma = c_1^r h_1$ で, $q = 2r+1$ のとき, $\Delta_{[2]_r, r}(\omega)[\gamma] = \Delta_{r, r}(\omega)[\gamma]$ が, ω のとり方によつて異なることと, 定理は示してなる.

文 献

[1] R. Bott, Lectures on characteristic classes and foliations, Lecture Notes in Mathematics, 279, Springer-Verlag,

Berlin-New York, 1972, 1-76.

- [2] H. Suzuki, Characteristic classes of foliated principal GL_r -bundles, Hokkaido Math. J. IV (1975), 159-168.
- [3] W. Greub, S. Halperin and R. Vanstone, Connections, curvature, and cohomology, Vol. I, Academic Press, 1972.